

Literature cited

- Chiarugi, A. and Francini, E. 1930. Apomissia in *Ochna serrulata* Walp. N.G. Bot. Ital. 37: 1-250. Chikkannaiah, P. S. and Mahalingappa, M. S. 1975. Ovule and female gametophyte of *Ochna squarrosa* L. Proc. 62nd. Indian Sci. Cong. Part III. Abs. 76. Davis, G. L. 1966. Systematic Embryology of the Angiosperms. Wiley. Ghosh, R. B. 1964. Supernumerary arche-sporial cell in *Ochna atropurpurea*. Curr. Sci. 33: 116-117. Narayana, L. L. 1963. Contributions to the embryology of Balsaminaceae I. J. Indian Bot. Soc. 42: 102-109. Narayana, L. L. 1965. Contributions to the embryology of Balsaminaceae II. Journ. Jap. Bot. 40: 104-116. Narayana, L. L. and Sayeeduddin, M. 1959. A study of the gametophytes in *Impatiens leschenaultii* Wall. J. Indian Bot. Soc. 38: 391-397. Rao, V. S. and Gupte, K. 1956. The pistil of *Ochna squarrosa* Linn. Curr. Sci. 26: 215-216. Saunders, E. R. 1939. Floral Morphology Vol. II. Cambridge. Venkateswarlu, J. and Lakshminarayana, L. 1957. A contribution to the embryology of *Hydrocera triflora* W. & A. Phytomorphology 7: 194-203.

* * * *

オクナ科の 2 種類について花の維管束配列, 花粉形成, 胚嚢形成を記述した。

〇ツバキとサザンカの雑種の新品 (津山 尚・山崎富佐子) Takasi TUYAMA & Fusako YAMAZAKI: A new cultivar of presumable hybrid between *Camellia japonica* and *C. Sasanqua*

1975年2月25日に浜松市の前田勝宏氏がツバキとサザンカの雑種と思われる数種の開花中の生標本を同定のため著者ら双方に送って来た。氏は先にも浜松市近郊でハルサザンカ品種群に属する2園芸品種を発見した(山崎富佐子, 1972) ツバキ類の研究者である。上記で発表した2品種の原樹は天竜川下流西岸の二軒の旧家にそれぞれ別々にあったが、今回のものはその東岸、磐田郡豊田町の旧家、伊藤一二氏邸に栽植されている。本年3月5日、著者らは現地を訪れて現物を調査し採集したのでここに研究の結果を報告する。同家にはツバキとサザンカの雑種と推定される5品種5株が開花中であつたが、その中の1品種について述べる。

天竜紅 (テンリュウコウ) 新園芸品種

花は淡赤色, (海棠色, Begonia Rose 標準色鑑一興林会), (R.H.S. 番号 52A-57C; H.C.C. 22, Crimson 25/1, Rose Bengal) 一重平咲で弁間にすぎ間があり, 筒芯で, 花弁数は5~6個, 外花弁(外部の小形の附加的な花弁で, 雄ずい筒と直接癒合してい

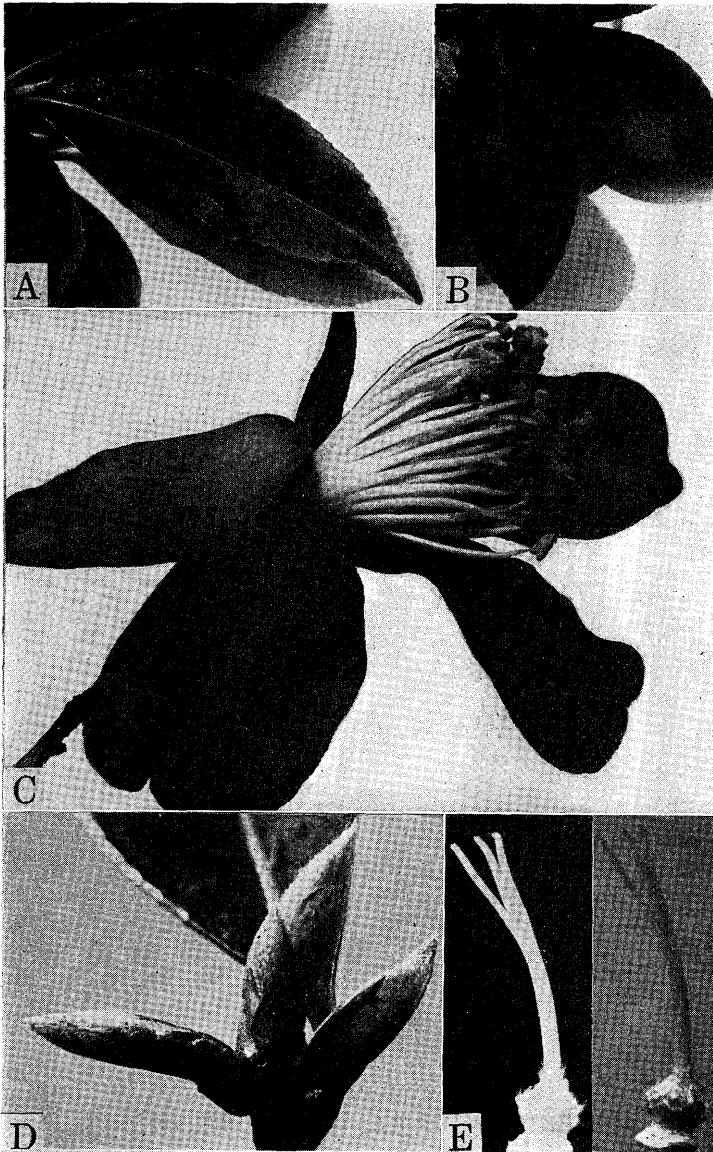
ないもの)の数は(0)-2-(3)個、満開時になお残存している上方の大形の萼苞の数は(1)-2-(3)個。萼苞は淡緑色で長さ0.7~1.0 cm、巾0.6~0.8 cm、背面が強く膨出し、かつ全体に銀灰色の細伏毛を密生している。下部のより小形の萼苞は開花時にはすでに落下している。花径は5.7~7.5×4.4~6.3 cm ばかり、花卉は狭倒卵形で長さ約3.5 cm、巾0.7~2 cm、やや大小不同、先端はやや深くとがった凹入部によって2分され、時には部分的に重なり合う2裂片を持っている。弁質はサザンカに比べてやや厚く、しわがない。花卉の上面には中心線に沿って凹入部附近と、別に下半部に白色の上向伏毛がある。下面の下半部にも同様の毛がある。満開時には花卉はほぼ水平に開出し、かつわずかに外反し、時にゆるい波状を呈し、稀には捻じれる。雄蕊群の集合体は整形の倒円錐形で、上方からみた直径は14~(18)~24 mm、高さ17~25 mm、雄蕊群の花糸の融合部(筒部)は高さ5~6 mm、基部は花卉とその基部中央において、(0)~1~(2) mm まで癒合している。雄蕊群の筒部は下方は黄色を帯びた淡黄色で、上方の癒合していない花糸に到るのに従って淡汚黄色、更に極く淡色に移行する。花柱は淡黄色で長さ15~18 mm ばかり、(7)~10~(13) mm 位まで深く3裂し、時にごく少数の白色長毛が見られる。子房は卵形で高さ4 mm ばかり、表面には光沢のある白色の絹毛状の長毛が上方に向って密に圧伏し、花柱の基部に及んでいる。子房は3室、果実は成熟しない(果実の件は伊藤一二氏による)。

樹高約4.3 m、3年前の移植時に強く剪定されたので自然の樹型は知り得ない。幹囲は50 cm(地上30 cm)、および43 cm(地上1 m)。昨年(1974)の枝は淡灰褐色で褐黒色の極く小形の皮目があり、サザンカに比べて毛は少なく、不揃いな短立毛がある。

葉は革質で濃緑色、表面は光沢が強く裏面は淡緑色。葉身は楕円形または楕円状倒卵形、長さ4~8 cm、巾2~4 cm、先端は短尾状に漸尖、基部はやや狭いくさび形で、主脈に沿って少し中折れし、かつ上方で弓なりに少しく外反する。鋸歯は鈍歯状。上表面の主脈は隆起し、側脈および網脈は明かに陥没している。葉柄は約3~10 mm、葉柄の上面から主脈の基部にかけて斜上毛がある。葉の裏面は淡緑色で、コルク質の小点(幼葉時にある長い絹毛状の伏毛が落ちたあとの癒傷)がある。

本園芸品種の外見はいわゆるハルサザンカ群の中では最もツバキに近似していると思う。牧野富太郎博士はハルサザンカそのもの、即ち *Camellia Sasanqua* var. *vernalis* Makino を記載するに当って、これをツバキとサザンカの交配の結果であると推定しつつも、その形態はサザンカのそれが優先していると書いている。本種では逆に、推定される交配種の形態が著しくツバキに傾いていると認められるので、上記の5品種の中から特に取り出して報告したわけである。

本種においては、花卉の質はやや厚くてツバキに傾き、雄蕊群の融合部の高さはツバキとサザンカの中間にあり、これと花卉との融合の程度もまた2者の中間である。葉身上面の毛はサザンカよりも少ないが、全く無毛のツバキとは異っている。サザンカ



では萼苞片は開花時にはすべて落下している。ツバキではそれが全部残存している。本種においては上方にある萼苞が開花時に 1~3 個残存し、ここでも中間型を示している。

材料を発見し提供された前田勝宏、戸田英雄氏、心良く調査を許された伊藤一二氏、調査に協力して下さった伊藤吉雄氏に深謝いたします。

Summary

A new *Camellia* cultivar, Tenryûkô, was found by Mr. Katsuhiko Maeda, an enthusiastic *Camellia* lover at the Hamamatsu City, in a private garden of Mr. Ichiji Itô. The garden is in a small village of Toyota-machi, Iwata Province, Shizuoka Prefecture, where a stand of this kind has been cultivated for many years. Unfortunately, however, the tree was transplanted for the distance of several meters owing to the reconstruction of a highway about 3 years ago, so that the tree is badly trimmed and in addition the top of the trunk is cut off. Now, it is about 4.3 m high, and the diameter of the trunk at the level of 30 cm above the ground surface measures about 50 cm. The leaves are fairly large and remind us narrow-leaved *Camellia japonica* var. *japonica*. On the contrary, hairiness on the midrib of the foliage leaves is of *Camellia Sasanqua*. Nature of the petals, the tube of the androecium, behavior of the perules are all intermediate between the two species. The flower is single, 'Begonia Rose' (Ridgeway) or 'Red group no. 52A-57C' (R.H.S.). The ovary is densely covered by silky white hairs somewhat grouped in some dozen tufts and curling up to the basal portion of the style. The style itself is variable in hairiness from entirely glabrous to sparsely appressed hairy all the length of the style. No fruit is born.

Literature cited

牧野富太郎: Observations on the Flora of Japan (*Thea Sasanqua* (Thunb.) Nois. var. *vernalis* Makino) in Bot. Mag. Tokyo 19: 135, 1905. 牧野富太郎: A contribution to the knowledge of the Flora of Japan. (*Camellia vernalis* Makino) in Journ. Jap. Bot. 1: 49, 1918. 山崎富佐子: ハルサザンカの 2 新品種。Two new cultivars belonging to *Camellia vernalis* group (with fig. of the

Fig. 1. A. The foliage leaves of a stout branch. \times ca 1. B. The same of the flowering branch. \times ca 1. C. A flower, a little flattened, with a petal at the upper portion being twisted and cut off at the midway. All the leaves are deleted. \times ca 2. D. Apical buds of a stout branch. \times ca 4. E. A pistil photographed from the same direction in the different light-effects. \times ca 25.

fls. and the line drawing of the ovaries). in Journ. Jap. Bot. 47: 121-123, 1972. 山崎富佐子: 562 銀竜 Ginryū. (現代椿集, Encyclopedia of Camellias in color, p. 392 (diagnosis), et p. 219 (photo), 1972, 講談社. 箱田直紀・武永順次・松本正雄: サザンカの品種分化に関する史的考察. 3. 学名の変遷と植物学的分類, p. 5-8. 東京農工大学農学部農場研究報告 6, pp. 65, 2 pl., 1974. 興林会: 標準色鑑 pp. 51+26, 1943—[Ridgeway: Color Standards and Nomenclature, 1912 の事実上の模写本]. The Royal Horticultural Society: The R.H.S. Colour Chart. 1966, London (R.H.S.). The Royal Horticultural Society: Horticultural Colour Chart 2 vols. 1941, London (H.C.C.).

□ S. Lipschitz & I. Vassilczenko: **Herbarium Centrale URSS** (Herbarii Instituti Botanici nomine V.L. Komarovii Academiae Scientiarum URSS historia ab initiis ad tempora nostra) Nauka 発行 1968 年 露文, 142 pp. 78 カペイカ。本書は今年レニングラードで開かれた第 12 回国際植物学会に参加された大橋広好博士が寄贈をうけて持ち帰られたものである。ソビエトの出版物の中でも分類学研究史も兼ねたハーバリウムの案内書は、我が国ではほとんど知られていなかったと思われるので、少し古いを紹介する。本書は序文の他、3 部に分かれた本文と 50 頁をこえる長い付録から成る。本文は表題の示すとおりコマロフ植物研究所の標本室の紹介である。現在のコマロフ植物研究所は 1931 年に、それまでは各々独立した組織であった Botanical Museum of Scientific Academy (1835-1931) と Leningrad Botanic Garden Herbarium (1823-1931) を統合して作られたものである。本文ではそれら研究所の前身がどのようにして成長してきたかを述べ、現在の研究所となつてからの研究の発展、所蔵標本の充実などを解説している。また「高等植物分類地理部門と、その基礎をなす標本館の基本的な任務は Flora URSS の編集と出版であった。」という同書の刊行のいきさつも述べられている。ソビエト連邦内のフロラの調査を行なった研究者とその調査記録(場所と収蔵標本数)が、地域別、年代順にくわしくまとめられている。さらに付録には「我が国の植物学者と標本館に標本が保管されている採集家達のほとんど全部の筆跡が写真で公開されたのはこれが初めてである」と力説されるとおり、145 枚の写真により、主にラベルに記された彼等の筆跡を載せている。本書はロシア語で書かれているため Stafleu が Taxon 17: 303-304 で評している Shetler の The Komarov Botanical Institute や, Levedef, Lipschitz 等による An outline of the history of the V.L. Komarov Botanical Institute of the USSR Academy of Sciences (1714-1961) に比べ読みにくい点はあるが、日本と密接な関係のあるソビエトの分類学研究史が具体的におさめられており、付録の特色ともあいまって有用な出版物であると思われる。(邑田 仁)